I

問 1　c

問 2　e

問 3　b

問 4　a

問 5　a

問 6　i

問 7　b，d

問 8　g

II

問 1　21（%）

問 2 (1)　32（%）

(2)　－4.5（kg）

(3) ①　b

②　b

③　c

④　a

⑤　b

⑥　c

⑦　a

Ⅲ

大学は教育、研究機関としてあらゆる人々に開かれており、人は望めばどれだけ歳を重ねていても大学に入学できる。就職した後に改めて大学に入り学び直す人もいれば、子育てが一段落した後で初めて大学の門を叩く人もいる。また我が国ではあまり一般的ではないものの、高校卒業前に大学に「飛び入学」することも可能である。このように「大学生」とは本来多様性を抱えた存在であり、この多様な存在を「大人」か「子ども」か決定することなど本来不可能な問題であることは最初に指摘しておかねばならない。とはいえ、ここではあくまで現在の日本における大多数、すなわち「高校卒業後に社会活動を経ることなく大学に進学した 18 歳から 22 歳の人々」を大学生の定義として論を進めていくことにする。

さて、上の大学生の定義に従うと、彼ら彼女らは大学入学時点で日本の成人年齢に達しており、制度上は「成人」と認められる。つまり選挙権を獲得し、結婚が認められ、親の同意なく様々な契約が可能になるという点では大学生は紛れもなく「大人」だと言える。しかしその一方で大学生が「大人」として扱われないケースも少なくない。経済的に自立しておらず、社会経験が備わっていない人間は社会や集団に貢献することができないため、まだまだ「一人前」ではなく「半人前」だという意識は社会に明確に存在する。制度上は「成人」ではあるが、「一人前」とは認知されない。こうした両義性が、大学生が「大人」か否かという問題を生み出している。

一般的に言えばこうした抽象概念は、制度と認識が両立して初めて成立するものである。例えば通貨は制度によって定められていたとしても、人々がそれを価値のあるものと認識しなければ流通することがなく、機能もしない。逆にある人々が現実の場で何らかの媒体を用いて交換を行なっていたとしても、国家がそれを制度として規定していなければ、通貨と呼ぶことはできない。同様に制度上「成人」であったとしても人々に「一人前」と認識されなければ「大人」とはなり得ず、経済的に自立した「一人前」であっても制度の上で「成人」と規定されていなければ、「大人」として活動することはできない。つまり、「大人」とは制度上の「成人」と認識上の「一人前」の双方を満たして初めてそれとして認められるものであり、この立場から言えば大学生は「大人」ではなく「子ども」に留まると結論づけることができる。